

世界農業遺産支援プロジェクトを通じて

宮城県南郷高校 世界農業遺産支援プロジェクトチーム

私たちはこの2年間世界農業遺産支援プロジェクトとして、コロナ禍ではありましたが、少人数の利点を活かして下記のような支援をして参りました。

<令和2年度>

<令和3年度>

4月	大崎耕土水源学習（鳴子温泉）	4月9日	全校生徒へ大崎耕土支援プロジェクト説明
5月	大崎耕土支援プロジェクト全校説明 全校生徒大崎耕土世界農業遺産講話	4月24日	全校生徒大崎耕土世界農業遺産講話
		4月25日	大崎耕土水源学習（鳴子温泉）
6月	在来野菜「鬼首菜」栽培支援	5月22日	鳴子温泉南原介護施設花壇作成
7月	水田環境生きもの調査（2年） 大崎耕土水利用学習（1年） 鬼首菜栽培プロジェクト（採種）	6月9日	自転車による鳴瀬川流域調査（下流域）
		6月13日	在来野菜「鬼首菜」栽培支援（種乾燥）
		6月26日	在来種「鬼首菜」栽培支援（種採種）
8月	佐渡視察 鬼首菜栽培プロジェクト（播種）	6月27日	仙台にてSDGs マルシェ参加
		7月2日	学校水田環境生きもの調査（2年）
9月	地域文化（漆作品作り体験）（3年） 稲刈り自然乾燥米杭かけ支援	7月14日	自転車による鳴瀬川流域調査（中流域）
		7月30日	田尻総合支所、大崎耕土世界農業遺産展
10月	南高高校文化祭中間報告	8月9日	ジオラマと活動写真展示
		8月2日	在来種「鬼首菜」栽培支援（播種） 鬼首地区にて環境調査トンボ捕獲ナンバーリング
11月	鬼首菜栽培プロジェクト（収穫） 新米の試食会	8月5日	自転車による鳴瀬川流域調査（上流域）
		8月9日	佐渡世界農業遺産視察
2月	除雪支援	8月11日	トキとの共存を目指す佐渡農業・環境再生の取り組み
		8月6日	美里町近代文化館世界農業遺産展
		8月25日	ジオラマと活動写真展示
		9月9日	地域文化（漆作品作り体験）（3年）
		10月2日	自然乾燥にこだわる稲の杭掛け作業支援
		10月16日	自然乾燥にこだわる稲の脱穀支援
		10月29日	南郷高校文化祭中間報告
		11月13日	鬼首菜栽培プロジェクト（収穫）
		11月24日	新米の試食
		12月9日	大崎耕土水利用学習（1年）
		12月7日	居久根環境調査（2年）
		12月10日	地域文化・農文化学習（3年）
12月24日	活動のまとめ ①		
		1月7日	除雪支援
		1月13日	活動のまとめ②
		2月15日	大崎市世界農業遺産推進課・美里町産業課意見交換会（zoom会議）
		3月	まとめと次年度の計画

この支援を通じて私たちは、大崎耕土の世界農業遺産を学ぶと共に、この大崎耕土が持つ未来に向けた大きな可能性を感じました。数百年前から受け継がれてきた巧みな水の管理を中心に生物多様性や農文化・地域文化そして伝統文化と後世に受け継ぎ伝えてゆかなければならないと強く感じました。しかし、いざ、現場を訪れると、そこは過疎の限界集落であり、10年先を考えると、栽培技術の継承や景観を守ろうとしても、そこで生活している人達が誰もいなくなってしまう、集落そのものが消えてしまいのではないかという不安が増すばかりです。

8月に佐渡を訪問し、世界農業遺産認定から10年後を見てきました。絶滅したトキが450羽以上現在では自然繁殖していました。水田もきれいに管理され、食事をしたお店では、トキの観察が行われ、それを記録するなど一般市民まで世界農業遺産のトキを守ろうという意識の強さを感じました。

大崎耕土の世界農業遺産と比較すると大きな差を感じました。そこで私たちは、大崎市の世界農業遺産を市民に広く知ってもらう方法と、私たち若者がどのように係わり、10年先に持続可能な世界農業遺産を残し、係わるかを考えました。

まず、絶対的に認知度が低いと感じています。私たちの活動を通じて新聞紙上で「世界農業遺産」という活字は何度か見ましたが、その他にはあまり見るできませんでした。PR不足を感じました。それと同時に、大崎耕土の世界農業遺産とは何？と考えたとき、あまりに広く、様々なものが絡み合っただというものがわかりません。中心となるものを決めてイメージしやすいようにすると共に最大限PRすることが必要と思います。

認知度を高めるために

1. 世界農業遺産が大きすぎてイメージが付かない。代表する「米」をイメージ商品としてロゴマークを付け最大限PRする。
2. 野菜や伝統工芸、お土産などのお菓子にもロゴマークを付ける。
3. 小中学生にしっかりと大崎耕土「世界農業遺産」を教育する。
4. 小中学生に世界農業遺産に係わる活動に参加を呼びかけ体験させる。
5. 高校生が中学生に活動サポートを行う。

小中学生が理解できれば、家庭で世界農業遺産の話が出る。そこから祖父母のことを考える。活動に参加し支援する。10年後小中学生が大人になり、世界農業遺産の活動を支える。

若者が過疎や限界集落を支援するために

1. インターネット環境を整備する。
2. 車の移動が絶対条件で、道路の整備。
3. 若者が住める住宅支援。若者同士が集団で生活できる集落をつくる。
4. 地域に経済活動ができる仕事がある。
5. 農業生産物等の流通を含め販売路と地域（温泉旅館）等との連携

若者はインターネット環境が不可欠で、ネット販売等にも必須です。お金をあまり持っていないため安く住める環境を提供してほしい。普段の買い物や病院は車の移動で対応、時にはお年寄りも助けることができる。居住スペースを作り、若者を集め孤立感をなくす。ここから経済活動ができればよい。現地で作った農産物が売れば生活できる。

私たちは支援活動を通じて感じたことを、大崎市に伝えたいと思います。